
去った日常

羅針

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

去った日常

【Nコード】

N8596Z

【作者名】

羅針

【あらすじ】

現実逃避を願っても、やっぱり日常が好きな青年と、日常を願っているのに、非現実に巻き込まれる少女のお話

出会い

「うっさみい」

今日はクリスマス。彼女と呼ばれるものを持ってない暦17年。

名前を古見^{こみぞん}在という。古見 存。

基本、コミゾンと呼ばれている。

眼は黒、少し赤みがかかっている。髪は白。銀髪のほうがあっている表現だ。

銀髪はロングヘアで肩よりちょっと長いくらい。たまに女の子と間違えられるほどの容姿。

容姿端麗、頭脳明晰。女の子が放っておくわけではないのだが、モテない。

クリスマスに独りというのはとても寒い。ましてや、晩御飯を買いに行くとなると億劫になる。

そう、クリスマスツリーのまわりにはカップルどもがうじゃうじゃいやがるのだ。

(ひっそりとしているよ！)

心の底で大声を放ち、空を見る

空を雲が覆っていた。

(一雨きそうだな…… それまでにご飯買っておこう……)

ハロ ーズまで走る。

「ん」

背伸びをした。ハ ーズの近くの公園でご飯を食べて、そのまま立ち上がり背伸び。

カツサンド3パック、ハムマヨサンド6つ、200g程度の弁当30個。

「足りねえな……」

胃袋をどこに持って行ったのだろう。

この世界には特殊な力を持った人物が、10人いる。

一人は、電撃

一人は、火炎

といった風に、要は超能力^{サイ}だ。P S I^{サイ}を使えるだけで、威張れるのだ。

コミゾンにはこれといったP S Iは無い。

P S Iは、

「99%の才能と1%の活力」があれば引き出すことが出来る人間に最初から備わった力だ。

コミゾンには才能があるが、人生に、完全に無気力だった。

何をするにも無気力・脱力。モテない最大の理由かもしれない。

「何かいいこと起きねえかな……」

夜空を見上げる。いやな予感がする。

ポツポツと雨が降り始めた。

（やっぱりかあ）

帰ろ、と言つて地面を見たその時、

「危ない」

「は？」

上を見るとそこには一人の女の子が落ちてきた。

「うわわわわ」

お姫様抱っこで救出

「邪魔」

ヒョイツと腕から逃れると、その少女は空を見上げた

「一般人が紛れ込んでるじゃないか、殺す」

「は？」

キュルルルルと回転する矢がコミゾン目掛けて発射された。

キユイイン！

その矢は兆弾され、打った男へ戻っていく

「邪魔をするな」

「一般人を巻き込むな」

バチバチと火花を散らす二人。男は未だに宙に浮いている。

サイキツカーか？

少女は手を前にやると「衝撃^{ブレイク}」と言った。

次の瞬間、少女は空に舞い、男と対決していた。

コミゾンは腰が抜けて立てなかったが、何とか逃げた。

翌朝

起きた。朝になったので起きる。

「なんだったんだ昨日は？」

独り言をブツブツつぶやいている「ミミゾン」。

「……うにゅ」

「……」

（何も見てない聞いてない。）

地面では昨日であつた少女が寝転んで熟睡していた。

「さ！朝御飯食って学校行こう！」

「……私も」

「……」

場が沈黙する。

「返事は？」

「……」

「返事は？」

「いや……その……」

「返事は？って聞いてんの」

「はい。スミマセン」

「よろしい」

「……」

こいつ……中1くらいか？

「何歳？」

「19」

「……嘘だろ？」

バツ！と食べさせるために持たせていたフォークを俺の眼に突き立てる。

「馬鹿にしたな？」

「スミマセン！」

「よろしい」

「……」

「ふーん ふーん」

出していたサラダとパンと順調に食べ進める少女

「なんでここに来たの？」

年上だったとは……

「行くアテがないから」

「……」

（こんな爆弾娘、いらねー……）

「あ、ちゃんと今日出て行くからお構いなく」

「あっそ……」

いつのまにか冷蔵庫の前に行って片っ端から口に詰め込んでいるこの少女。

「名前は？」

「Q p o 1号」

「……は？」

「あんたには関係ないわよ。固有名はミナトだからそう呼んでくれて構わない」

「あんたは？」

「古見 存」

「コミゾン？ 本名？それ」

「本名だよ」

「そっ」

「んじゃ、俺は学校行くぞ。お前、適当にどっかいけよ」

「は？ あんたは私とこれからデートよ」

「……は？」

12月25日 <AM>

「俺は学校行くぞ。そろそろマジで遅刻する!」

「やゝだぁ デートデートお」

「何で、俺に、そこまで、固執するんだ?」

「始めて一緒に寝た人だから(ポツ)」

「誤解を招く発言は止めろ」

「いこーよ 25日にもなって学校なんておかしいよお」

「補修だ」

「頭いいのに?」

「テストはまともに……? なんで知ってんの?」

「貴方のことなら何でも」

「俺の名前知らなかったよな」

「あの時はあのとときだよ」

「キャラ変わってるよな? 絶対。」

「あゝ もう! 補修行がなかったらマジで落第なんだよ!」

「いいじゃん。」

「よくねえよ! お前も早く帰れよ!」

「いーやーだぁ」

「年上の癖に駄々こねるな」

「デートしたいもん」

「(なんだこいつ)」

「わかった。帰ったら行ってやるから」

「本当!?!」

「ああ。うん」

「パアッと顔を輝かせ、笑顔で返答する。」

「ミナトは眼は黄色で釣り眼。」

「髪は澄んだ透明感がある水色(本当に透明なわけではない)の長めのショートヘア。」

寝起きはボサボサだった……

性格はコロコロ変わるからよく分からん。

俺はできるだけ補修を長引かせようと決意して家を後にした

12月25日 <PM>

補習授業が終わり、学校を出て、腕時計を覗く。

「6:20分。」

流石にどこかへ行こうとは思ひ出さないだろう。

学校の門をくぐり、近くの信号まで来ると、コミゾンは眼を見張った。

「……ミナト？ ミナト！？」

信号の反対側でミナトが腹から血を出して倒れていた。周りの通行人（野次馬）が

とやかく言っているが、人ごみを掻き分け、ミナトの元に辿り着いた。

「あれ……？」

「おまつ！何してんだ？」

「心配……してくれてるの？」

「当たり前だろ！」

「えへへ……っ……」

普通に立ち上がると歩き出した。

「お前大丈夫なのか？」

「平気だよ。これくらいなら。」

銃で撃たれたような傷痕が5、6カ所あるのに……無事？

んなやけあるかあ！

「おい！病院に行かなくてもいいのか？」

「うーん……病院じゃ、傷、治らないし。」

もう今日は帰るね」

⌋
⋮
⌋

じやつ　　と行って走って帰った三ナト。なんだったんだろう？

12月25日 <PM>

家に着いたのが8:40。遅くなった……

なんだか家に帰りたくなって遠回りしてきた。

絶対無事じゃないよな。あれ。

「あゝ 気になる」

誰にも届かない心配を放ってみる。

その時家のチャイムが鳴った。

「……」

なんだか出たくねえな……出なかったら物語進まないし、仕方ないか。

「はい」

「こんばんわ」

「……ミナト？」

どうせこんな展開かと思ってたけどな。

「私はミナトではない。」

「だって！見た目とか同じじゃん！」

「私はQp o 10号。固有名ナギサ」

「はあ……」

納得した振りをしておく。

「今日一日泊めてくれ」

「はいはい」

なにこいつら……口調が違うからいいけどさ。容姿同じじゃん！

「んで？今日帰るとか言ってた？」

「それはミナト。」

「そういう問題だよ」

「私もあなたと話してみたかった」

「なんで昨日ミナトが泊まったのしってたの？」

「Qp o 系統は研究所と思考がリンクしている。」

それはQ p o全体で共有できる」

「そっか」

「で？何から話せばいい？」

「何から、というと？」

「お前は俺と話したくてここに来たんだろう？」

「分かりました。一つ相談したくて来ました。」

「内容は？」

「私たちQ p oを守ってください。」

……私たち？

「何人いるの？」

あ……ノってしまった。

「全部で100体います。」

ある組織で作られ、世に放たれたのですが、

脳リンクが出来ることから2体以上捕まえて兵器として

使おうとする組織が後を立ちません。

なので、私たちがその組織から守ってください。」

「なんで俺なんだ？」

「あなたは世界で一番強い「力」を使いこなせるからです」

「……最弱の「テレキネシス」も使えないのに？」

「はい。」

「それじゃあ 使わせてみてくれよ」

「分かりました」

そう言つて俺の腕をつかんだ。

次の瞬間、視界が一転した

12月25日 <深夜>

「ここは？」

「研究所です」

PSI能力開発をしています。」

「ふーん」

至る所で機械が「ウィーン」と唸りをあげている。

「ここです」

「うわっ すごい」

相当な数のミナトやナギサがいた。

「全て固有名が在ります。覚えますか？」

「遠慮しておくよ」

「やあ こんにちは」

「あっ こんにちは」

研究所の博士みたいな人が握手を求めてきたので握手をした。
今ってこんばんわだよな？

「君が例のコミゾン君かい？」

「え？あ！はい」

「それじゃ、こっちに来てくれ」

「はい」

機会がいつそう多い部屋に来た。

「これをつけてくれ」

「なんですか、これ？」

「脳波を一定間隔で狂わす機械だ

君にはセンスはあるのに氣力がないと聞いた。

今は役目が出る。それを強く思い浮かべて」

護衛は決定なんだ……

「了解です」

あいつ等を守る……あいつ等を守る……あいつ等を

「グウ」

「よし」

俺は寝てしまったようだ

「ここは？」

「あ！おきたあ 今日補修ないんだよね？」

「うん。」

「私はミナトだよ！」

こいつ、初めて会った朝は性格怖かったけど……キャラチェンジ？

「そうか」

「私が能力発動まで指南することになってるから」

「オッケー」

「それじゃ、まずはねえ……ご飯作って！」

「……は？」

そこにはキッチンと冷蔵庫がある。

「私、ご飯作れなくて……」

「はいはい」

俺も腹減ったしな。

「私も食べる」

「あ！ナギサはだめ！」

「いいよいいよ」

「えーっ」

「ありがとう」

っていうかナギサ影薄いなあ 気付かなかった。

↓1時間後↓

炊飯器がなかったからナベでご飯を炊いている。

神経がいる作業だ

「2時間後」

これで7回目の失敗だ

「3時間後」

米なくなってきたな

「4時間後」

もう何回目だろう

「お腹減ったよう」

「同じく」

「俺もだ」

「なんで炊けないの!？」

「んじゃお前がしろよ!？」

「……」

「今日はおかずにしようか……」

「うん……」

「分かりました」

年上ロリコン顔に囲まれてご飯を食べた。
これから、どんなことをするんだろう？

12月26日 <AM>

「無理無理、吐く！」

「逃げるなあ 特訓だああ」

フツ！つと目の前にナギサが現れる

ガシツ！つと腰を掴まれ身動きが取れなくなる

「しまった！」

「ナイスナギサ！ <炎バイルよ>」

「ちょ！ ま！ああああああ」

ゴアア つと炎に包まれて焼け死ぬ感覚を感じた。皮膚あちい！

「殺すきか！？」

「<引力アトラクション>覚える気あるの？」

「それを言うなら<反発力レフション>よ」

「どっちでもいいのよ！ さあ 使いなさい」

「んな無茶な！」

「あんたなら出きる！さあ！ <炎バイルよ>」

「くそ！ <反発力レフション>！ ぐあああああああ」

失敗。そろそろ死ねるんじゃないかな？

「こんの役立たず！」

「うつせえ なんのヒントも貰ってねえぞ！」

「それなら、先ず、炎を追い払うイメージと、QpOを守るとい

う感覚を持つて」

「え？ ああ頑張る」

「ナギサあ 面白くないじゃん」

「今のままでは効率が悪い」

「知らないよそんなの」

Sめ

「さ！ <炎バイルよ>」

イメージ……イメージ……イメージ……きた！

「<反発力>!!」
レプリシオン

炎が方向を変え、ミナトに向かう、それをミナトはパイロキネシスを止めて回避

「やっと出来たわね」

「グア!? グアア」

脳が焼ける……

「ぐあああああああ!」

焼けるような痛み……なんだこれ……

「能力の反動ね。 博士呼んできて」

「了解」

フツ つとナギサが消え、次の瞬間、ヘアリング博士を連れてその場に現れた。

「やはりこうなったか。 <治癒>」

ポアアアっという感覚が頭を撫でる。

徐々に頭の熱が冷えていく感じで痛みは去った。

「なんども力を使えば慣れると思うから、頑張ってみて」

「あ……はい」

12月26日 <PM>

以前に「特殊な能力者は10名いる」と言っただが厳密には間違いである

地球の人口を約6億人と考えて1/4、実に2億人の能力者が居る。日本には2300万人だっけか？

そして、能力レベルというのが存在する。

・レベル1 <物体移動・テレキネシス>

・レベル2<炎・パイロキネシス><電気・エレキネシス><液体・アクアキネシス>

<遠距離会話・テレパシー>

・レベル3 <治癒・ヘアリング><衝撃・ブレイク><瞬間移動・テレポート>

・レベル4<予知・プレゴニクシオン><千里眼・クレヤボアンス><精神読み取り・サイコメントリー>

・レベル5<重力・グラヴィテーション>

・レベル6<反発力・レプリシオン><引力・アトラクション>
その他

他にもいろいろあるのだが、大部分はこれだ。

そして、レベル5、6を使える人物が合わせて十名。

いろいろな重大機関に勤めているやつらがほとんどだがこの十名が世界のいろいろな基準を決めている。

- ・能力申請してない能力者が居た場合取り押さえ、罰則
- ・レベル4の一部とレベル5以上の者は年に一度必ず集会に集まる
- ・未成年が能力を使う場合、申請が必要である

他にも100も200もあるが、一部だけを提示して見た俺は17歳だから……申請は？

「大丈夫、出ているわよ」

「！？ミナト？ナギサ？」

容姿はQPOの女の子が立っていた。

「私はQPO35号、能力は^{サイコメンター}精神読み取り」

少し読ませてもらったわよ」

「……んで？なんで出ているの？」

「博士が今日中には出来るだろうって、昨日から3日間の能力使用申請が出ているわよ」

「そりゃありがたいことで」

用意周到なんだな、この博士

「QPOっているんな能力使える人居るんだな」

今は休憩時間で研究所の外のベンチで缶コーヒーを飲命中。

あんまり美味しくないな……

「そうよ。^{テレキネシス}＜物体移動＞からレベル4の大部分まで。

美味しくないなら頂くわよ」

ひょいっと缶コーヒーを取られ、飲まれた。

こいつ、大人びてるんだな。

ここで研究が19年行われてるって事かな？

なんでこいつ等は19歳なんだろう？

「信じてたの？それ」

飲み終えた缶コーヒーを^{テレキネシス}＜物体移動＞でゴミ箱まで運ぶ

……名前聞いてないな。

「ああ 少な。」

「1号から順に年齢は若くなっている。私は18歳」
それでも年上……

「100号は8歳よ」

「ふうん」

「なんで二つの能力使えるの？」

常人にはきついと思うんだが。

「常人じゃないからよ。」

私たちが生まれた理由は《サイ・プレイヤー複数能力者》の育成。

私たちの脳リンクを普通の人につないで100種類使える人体兵器を作るのがここの研究所の裏の顔。

博士はいい人なんだけど……利用されてるっぽいの」

「つてことは、お前の能力は別のQPOも使えるつて事？」

「いや、今はオープン開放モード>ではないから。」

「んじゃ、なんで使えるんだ？」

「常人じゃないからよ……レベル1は全員使える

テレキネシス＜物体移動＞つて最弱つて言われてるけど

本当は使い勝手のいい能力なのよ」

「ふうん」

こいつでもないのか……

「なにが？」

「いちいち全部読み取るなよ」

「癖で……ま、私の役目は終わったから早く入ってきなさいよ。」

博士、呼んでるわよ」

「……早く言えよ。」

俺は立ち上がった。結構寒くなかったな、ここ

12月26日 <PM>

「なんすか？ 博士」

「うむ。 君の能力をPP（PSI Point）の制限なし使えるようにしたいと思う。」

この機械を頭につけてくれ」

「頭が痛くなつたのは……」

「PP許容値を超えてしまったからだ。」

PPはPSIを使うことで自然に増えていくのだが
君は常人の数千倍つて所か。」

どんだけだよ

「PPというのはサイポイントとか言っておるが本来は脳の容量を意味するんだ

PSIを使うことで脳は酷使されていく。

そして酷使の要領がオーバーしてしまうと、君みたいに頭が痛くなったり、

視界が悪くなったり。

やりすぎると死んでしまったり、体が動かなくなる」

「へー これからする、その機械は何を俺の脳に与えるんです？」

いやな予感がするんだよな

「脳に無理矢理能力をフル活用させる」

「は？」

スポ！つと頭に機械をはめさせられる

「大丈夫だ 治癒能力を使ってあげるから
ウィインと機械が鳴る。」

脳に無理矢理干渉させられていく。

「ぐあああああああああああああああ
俺は気絶してしまった」

「はあはあ」

私は現場へ急行してきた。

私の追ってはさっき潰した。長い戦いだっ

た Q p o 思考リンクでいろいろ入ってきたがこっちから向こうに流すのは N G だ。

現場は酷い有り様だった。

とんでもない重力で地球をへこませたような感じた。

地球上で何箇所もこの原因不明の超巨大クレーターが出没している。誰の仕業だろう？

これは……レベル7の問題になってくるわね……

「はあはあ」

俺は手足を拘束されたまま脳が吹き飛ぶ感覚に耐えた。

気絶から意識を覚醒させると思考は難しいほどだった。

何を見ても感じないし首も動かない。

体感時間で5時間くらいしてなんとか動くようになったら

そこは酷い有り様だった。

研究所はぐしゃぐしゃになおり、俺が居るところ以外は陥没していた。

「博士！？ 博士！！」

「ここまで能力が強いとは思わなかったよ

ま、研究所は粉碎だが、Q p o は全員無事。

私も何とか生き残ったよ」

「俺……が暴走しちまったって事ですか？」

「この機械が強制的にそうなるようにしたんだ」

「そう……ですか」

「博士！大丈夫？

＜ヘアリング＞

「治癒」のQ p o 連れてきたけど……」

「大丈夫だ、ナギサ、メルー。」

ナギサはく瞬間移動^{テレポート}で決まりかな

「そろそろこの拘束具、はずしてもらえませんか？」

このコミゾンは気付いていなかった。

コミゾンが地球に及ぼした大災害に……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8596z/>

去った日常

2011年12月29日21時33分発行